

Benesse Art Site Naoshima

PERIODICAL MAGAZINE

Benesse
Art Site
Naoshima

Emergence of the Artworks in the Seascape



島を巡り、美を巡り、自分を巡る旅

稲葉俊郎

Discovering the Islands, Discovering Art, and Discovering Myself

Toshiro Inaba

瀬戸内海にあるベネッセアートサイト直島を巡った。それは芸術というものが、どのようにわたしたちの暮らしへと溶け込んでいくことができるのか、そしてわたしたちを包み込んでいる自然といかにして新しい関係性を取り戻せるのか、そうした現代の切実な問いと実践の軌跡だ。

芸術にはいろいろな可能性がある。人生は、挫折と成功の連続であり、退歩と進歩、後退と停滞と前進の連続である。そうして人は学び成長し、人類はここまで続いてきた。人間がこの自然の中で生きるということは、本来はただそれだけでも日々が挑戦なのだ。芸術の営みは、そうしたことの顕在化なのだろう。生きることは、日々挑戦なのだよ、と静かに語りかけるように。芸術には、自己教育としての側面もある。

直島で安藤忠雄建築を多く見て、挑戦という言葉が不意に

浮かんできた。建築という枠組みでの彼の挑戦こそが、いろいろな分野の挑戦を同時に生み出し、触発し、その挑戦はまた、発見をも生んできた。直島に着き、最初に地中美術館へ足を運んだ。様々な挑戦を感じさせてくれる空間だった。見に来たものが全身で挑むような芸術体験。ただ口を開ければ与えてくれるような受け身のものではなく、見に来たものが感覚を開いて挑むように働きかけることで、呼応するように空間が開き反応していく場所。それはまるで儀式やイニシエーション（通過儀礼）のようなものだった。

近代においては儀式や儀礼が急速に失われていった。なぜだろうか。「儀式的」という言葉は中身がなく形だけの面倒なものであるという否定的な意味合いを含むものになってしまった。確かに、儀式が伝統というものを盾にして、人々を支配し、自由を阻害するために存在した側面もあったかもしれない。儀式の本質的な意味はとくに失われていた



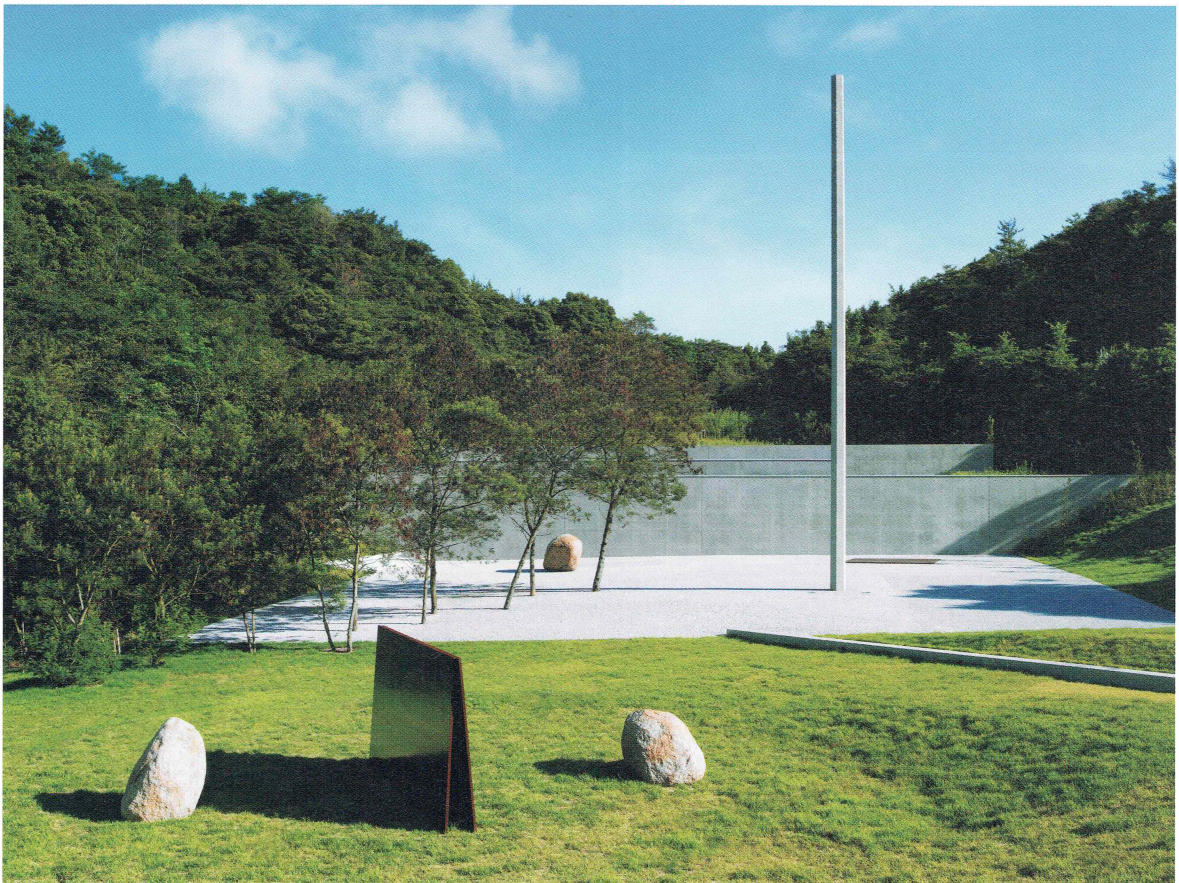
地中美術館 Aerial view of Chichu Art Museum

かもしれない。ただ、太古の人類は儀式や儀礼を必要性があって産み出してきたのだ。それは葬儀であったり祭事であったり、墓碑であったりした。だからこそ、わたしたちは現代の新しい儀式を再創造していく必要があるのではないだろうか。直島、豊島、犬島を巡った時、頭に浮かんだのは失われた儀式や儀礼のことだった。

儀式は心のエネルギーの通路だ。たとえば、葬儀について考えてみたい。わたしたちは死を前にしたとき、悲しみに打ちひしがれる。死の前では過去の経験はあまり役に立たない。悲しみが襲うと、心も体も先に進めなくなる。心の中には、心のエネルギーが水のように流れて動いているとすると、水の流れがすべてストップしてしまうようなものだ。水路はすでに壊れてしまった。水は流れていかない。そうした心の水路を新しく作り替え、また前を向いて生きていくために、わたしたちは葬儀といったような儀式や儀礼を必要とし、生み出してきたのではないだろうか。全身を動かすことで、身体と心とは呼応しあい、心の水路は自然に流れ出すのだ。人類が生み出した儀式の底にはそうした意味があるのだと思う。芸術も同じような根から発している。直島の地中美術館だけでなく、瀬戸内海を巡る芸術体験においては、儀式のように全身を使って体験することの深い意味を感じていた。豊かな島は水が循環している島だ。豊かな島である豊島で水源の在り処を見たときに、そうした心の水の流れが象徴的に浮かんできた。直島の李禹煥美術館では、○△□（マル、サンカク、シカク）の造形

を体験したが、それはまるで鉱物世界から人類に繰り出される禅の公案のような世界だった。空間の中を歩くだけで、頭ではなく体が勝手に哲学しているのだろう。

直島や犬島で展開されている家プロジェクトでは、家の中に住人のように作品が生活していて、家と家の間にも作品が点在している。島で作品を見て廻るという目標があるからこそ、順路のような働きをして、結果的に島を隅々まで巡ることになるのだ。作品は水路の役割を果たす。結果的に、島という全体こそがひとつの大きな美術館として体験されるのだ。いわゆる「美術館」は人工的な建物の中を歩くわけだが、島という大きな美術館を歩いていると感じてみるだけで、太陽の光を感じ、海のしお（潮、汐、塩）の香りを感じ、植物や鉱物や生き物までもが美術館の構成要素となる。そうした自然環境の中で、作品を発見しようと思いつながら島を巡るとき、すでにわたしたちの目は美を発見する目へと変貌している。ゴッホも似たようなことを言っている。「美しい景色を探すな。景色の中に美しいものを見つけるんだ。」と。家プロジェクトとして島を歩くだけで美を発見する目が開かれていくように、わたしたちが暮らしている空間を、そしてこの地球を巨大な美術館であると見立ててみる。そうした暮らしは、一日一日が発見と驚きの日々へと変貌するだろう。それは失った子供の目をもう一度取り戻すようなものだ。瀬戸内という豊かな自然から東京という自分の日常へ戻ったとき、東京は自然が少ないと感じ



李禹煥美術館 Lee Ufan Museum

るかもしれない。大地の多くはコンクリートで覆われ、地球は窒息しそうに感じられるかもしれない。ただ、空は地球すべてとつながっていて、一滴の水でさえも地球全土の水とつながっているのだ。東京などの都会の暮らしの中でさえも、空気の密度を感じ（それは同時に水の密度を感じることもである）、空間を貫通している光とその相互作用とを感じ続けるだけでも、わたしたちの感受性は損なわれることなく、確実に育てられていくことだろう。それは、瀬戸内の海と自然、そして芸術とが一丸となって直接的な体験として教えてくれていたことなのだ。

島の旅をしたときに印象的だったのが、常に海を介して移動しなければならないということだ。陸が光の当たる意識の世界だとすると、海は光の当たりにくい無意識を象徴する。瀬戸内での旅では、必ず海という無意識を介することで、頭が起きていようと海を経る度に全身は眠りについていくようだった。夢を見ながら陸地と陸地をつなぐ旅をしているように。海は生命を産み出す生の世界だが、同時に死の世界のようにも思える。なぜなら、これだけ膨大にある水を、人間は一滴たりとも飲むことはできないからだ。生命を育む水のはずなのに、船が沈没したら私たちは容易に死んでしまう。夜の海は、暗黒が口をあけているようだった。そうした疑似的な眠りと死の体験により、生命という現象は更新されている。

豊島でクリスチャン・ボルタンスキーの「心臓音のアーカイブ」を体験した。自分は循環器内科医として、仕事として毎日のように他者の心臓音を聞いている。暗闇の中で異邦人と化した遠い島で聞く心音は、まるで自分が自分自身の中へと入りこんだようだった。その体験は、豊島横尾館という浄土の世界と生命のトンネルとで通じているようだった。豊島美術館では、水の一滴も、海の水も、すべては部分であり全体であり、それは自分自身の生命ではないかと思った。生命は水がないと存在できない。そして、生命はひとつひとつの細胞から構成され、60000000000000 (60兆) 個に及ぶ部分と全体により生命は維持されている。一滴の水が、海という全体を織りなしているように。そして、その一滴の水はわたしたちのあらゆるところに不即不離で入りこんでいる。あらゆる生きとし生けるものの根底にある繊細さとか弱さとか、しなやかなさと強靱さを作り出している。一粒の水滴の中にも、はるか数十億年と続く生命の輪の時間が流れている。水が生命をつくり、海をつくり、空や空気をつくり、あらゆるところに生命の根源は浮遊し遍在している。生命の深い場所を体験として全身に刻み込むために、この豊島まで足を運んで来たのだ、という思いが自分を貫通した。豊島横尾館で浄土へ行き、「心臓音のアー

カイブ」で自分の体内へと逆行した。ミクロの原子へと自分が化した果てに、豊島美術館では更にいのちの根源へとどこまでも下降し続けた。果てしなくミクロへと。その場所は島の子宮であり、卵であり、水そのものであり、そのすべてが生命の歴史を輪廻する儀式でもあった。

直島の命名者が崇徳上皇ではないか、犬島の命名者は菅原道真ではないかと、語られていた。どちらも日本史最大の怨霊である。負のエネルギーを正のエネルギーへと変換していく。そのことは生きる知恵であり、呪術の側面を持つ芸術が担うマジカルな領域でもある。幸福は確かに素晴らしいものだ。ただ、それが悲しみに支えられていないと、その幸福は浮ついたものになる。日本の文化は、幸福よりも、その幸福を静かに支えている悲しみのほうへと、優しいまなざしを向けていることが多いと思う。過去の多くの悲しみの上に、今の幸せはあるのだ。そうしたことが顕在化している場所ともいえるベネッセアートサイト直島が、世界を代表する芸術の地へと変貌していったことは、まさに芸術がその役割を全うしているからであるとも言えるのではないだろうか。心の水路を循環させ、心のエネルギーを新しく循環させるように、大地のエネルギーを新しく循環させる力を芸術は持っているからだ。

島を巡り、美を巡り、自分を巡る。この旅で、自分はすっかり生まれ変わったような体験をした。そして、未来の医療はきつとこういう形のものになるだろうと予感した。日々生きる活力を得て、わたしたちが日々生きなおすために。病気を治す病院も大事だが、生きる力を得るための場も、医療が果たす役割だ。それは教育と呼んでもいいし、芸術と呼んでもいい。

藤原綾乃さんを始めとして、ご案内いただいた福武財団の方々のホスピタリティも本当に素晴らしく、そうしたことにも感動し続けた旅だった。教育をベースにした会社だからこそできたプロジェクトが、ベネッセアートサイト直島ではないだろうか。人を育てることは、ほんとうに尊いことだ。こうして、いろいろな種が蒔かれ、水が地球を巡るように思いの種が循環しているのだから。

稲葉俊郎 (いなば・としろう)

医師、東京大学医学部付属病院循環器内科助教。医学博士。1979年熊本生まれ。心臓カテーテル治療、先天性心疾患が専門。在宅医療や山岳医療にも従事。西洋医学だけではなく伝統医療、補完代替医療、民間医療も広く修める。2011年の東日本大震災をきっかけに、新しい社会の創発のためにあらゆる分野との対話を始める。単著『いのちを呼びますもの』（アノニマ・スタジオ）、『ころころするからだ』（春秋社）など

Discovering the Islands, Discovering Art, and Discovering Myself



I made a trip to and traveled extensively around Benesse Art Site Naoshima. It marked a desperate inquiry into and examination of how art can fit into our daily lives and how we can create new relationships with nature that surrounds us.

Art has many possibilities. Life is a series of failures and successes, recession and progress, and a succession of setbacks, slumps, and advancements. Thereby we have learned and grown, and human beings have survived up until today. Living in this nature is itself a challenge, each and every. Perhaps art is the visualization of such – as if quietly speaking to us, “Daily life is a challenge.” Art can be self-education as well.

Upon seeing several architectural structures designed by Tadao Ando on Naoshima, the notion of “challenge” suddenly came to my mind. Ando’s challenging spirit within the framework of architecture inspired and triggered challenges in other genres at the same time, prompting new discoveries as well. After arriving in Naoshima, I visited the Chichu Art Museum first. The museum was a space with full of various challenges. Visitors experience art as if they are taking on challenges with their entire bodies. It is by no means a passive experience that is being fed to an open mouth. When you open your mind and actively approach the space as if accepting a challenge, it opens up and reacts in response. This experience of art seemed ritual, or like an initiation.

In modern times, rituals and initiations have rapidly declined. Why so? The words “ritual” and “ritualism” have come to mean something empty and merely a formality. To some extent, rituals have imposed control and impeded freedom. Perhaps, though, the essential meanings of rituals no longer make sense. Ancient people must have invented them for necessity nonetheless. A ritual could be, for example, a funeral, a festival, or an epitaph. Shouldn’t there be a need to seek and to create new rituals again in our own time? As I traveled around Naoshima, Teshima, and Inujima, thoughts about the lost rituals came to my mind.

A ritual is a passage for mental energy. For example, let us focus on a funeral. In facing someone’s death, we may be devastated by grief. Our past experiences are of no help. Suffering from sorrow, we cannot move forward mentally and physically. It is like water has been stopped from flowing, if mental energy was like water flowing through our mind. The channel of water has already been destroyed. Water does not move. In order to reconstruct the channel in our mind and move forward, our ancestors had a need for and created rituals such as funerals. By moving our entire body, the channel in our mind restarts because our body and mind act in concert with each other. Rituals invented by human beings have such a meaning.

Art has a similar root. I felt the deep significance of experiencing art with my entire body, as if attending a ritual while experiencing art across the Seto Inland Sea. A rich island is one in which water is circulating. When I saw the water resource of the rich island as its name “豊島 – Tehima” suggests, a symbolic image of flowing ‘mental’ water occurred to me. At the Lee Ufan Museum in Naoshima, I experienced the figures, ○△□ – Circle, Triangle, and Square, which seemed to me like a Zen question spinning out of the mineral world to human beings. Not only my mind, but also my body was automatically meditating, while walking around the space.

In the Art House Projects on Naoshima and Inujima, each work of art “lives” in each house just like a resident. Works of art are scattered between houses as well. With the purpose of seeing works of art, people naturally walk across the span of island, from corner to corner. These works of art play the role of a channel. The entire island is experienced as a large museum. Normally, a museum is an artificial structure in which people walk around, but when you imagine that you are walking around the island as a gigantic museum, you are able to accept everything around you, from the sunlight, the smell of the tide, to the plant, creatures and minerals as components of the museum. When you look for the works of art in this natural environment, your eyes are already acting as an apparatus to sense the aesthetic. Van Gogh once stated a similar idea, “Don’t look for a beautiful landscape. You have to find beauty in a landscape.” As you walk around the island to experience the Art House Project and start to open your eyes wider to find beauty, you will see the space of your everyday life or this entire world as a huge museum. If you do so, your daily life will transform into a sequence of discoveries and surprises. It will be as if you are retrieving the eyes of your childhood. When you return to Tokyo from the Setouchi region blessed with a rich natural environment, you may feel there is little nature in Tokyo. Seeing most of the ground covered with concrete, you may think the earth is suffocated. However, the sky is still connected to the earth and every single drop of water is connected to water all over the earth. Even in life in big cities like Tokyo, our aesthetic sensitivity will be maintained or developed by feeling the density of air (which is the same as feeling that of water), light penetrating the space, and their interaction. This is what the sea and nature of the Setouchi region and art together have taught us through experiences directly with the senses.

The most impressive thing to me during the trip around the islands was that we always have to travel by sea in the region. If land symbolizes the world

of consciousness under the light, the sea symbolizes unconsciousness without light. During my traveling in the Setouchi region, since the sea as unconsciousness always intervened, I felt my body asleep all the time on board although my mind was awake, as if I was traveling to connect lands while dreaming. While it is certainly the world of life that produces lives, the sea seems to be the world of death at the same time because human beings cannot drink a single drop of the bountiful seawater. Although it nurtures lives, one can easily die when the boat sinks. The ocean at night was a darkness with its mouth fully open. Through the experiences of false sleep and death, life as a phenomenon is renewed.

In Teshima, I experienced *Les Archives du Cœur* by Christian Boltanski. As a cardiologist, I would listen to the heartbeats of others everyday for my job. However, the experience of listening to the heartbeats of this artwork in the darkness as a stranger traveling to the remote island, it was as if going deep inside myself. The experience is something like connecting through a tunnel between anima and the world of Buddhism's Pure Land, in common with Teshima Yokoo House. In the Teshima Art Museum, I thought of a single drop of water and the seawater as being both part and the whole, and also perhaps as my own life. A life cannot survive without water. Life is composed of cells and maintained by both 60 trillion parts together with the whole, as if drops of water gather to form the ocean as the whole. A drop of water exists everywhere in the body. The delicacy and vulnerability underlying in all living things create flexibility and tenacity. In a drop of water, the time of the wheel of life that has been continuing for billions of years flows. As water forms life, the ocean, the sky, and air, this origin of life is afloat everywhere and is ubiquitous. The idea that I came to Teshima in order to experience and inscribe this deep place of life into my entire body transfixed me. I experienced another world of Buddhism's Pure Land by visiting the Teshima Yokoo House and reversely came back into my own body by experiencing *Les Archives du Cœur*. After becoming a microscopic atom, I traced back to the origin of life at the Teshima Art Museum for what seemed like infinity. Endlessly toward the micro. The museum seemed to be the womb of the island, an egg, and water, and also a ritual repeating the history of life.

They say Naoshima may have been named by the grand emperor Sutoku (12th century) and Inujima by Sugawara no Michizane (9th century). Both are notable vengeful ghosts in Japanese history. To convert negative energy into positive energy is not only a wisdom of life but also a magical domain that art can enter because

art is like magic in some respect. Happiness is certainly wonderful. Unless supported by grief, however, happiness cannot be substantial. Japanese culture seems to have mercy on grief that quietly supports happiness rather than on happiness itself. A great deal of past grief underlies today's happiness. Perhaps it is because art fully plays its role on the island of Benesse Art Site Naoshima, as a concrete example of the fact that happiness is supported by past grief, and which has become one of the most remarkable art sites of the world. Art can create a new circulation of energy of the land, as it can promote the circulation of water in our mind and create a new circulation of our inner energy.

Discovering the islands, discovering art, discovering myself. During this journey, I experienced feeling reborn. It made me feel that medical care would be like this in the future. While hospitals that cure diseases are certainly important, for us to gain the energy to live everyday and to renew our lives, medical care should endeavor more to provide vigor to people. This effort can be called "education", or "art".

I am also grateful to Ayano Fujiwara and other people from the Fukutake Foundation for their impressive hospitality during my stay. Benesse Art Site Naoshima may not have been possible without Benesse Holdings, Inc. that is a company originally dedicated to education. Educating people is truly a noble deed, and in sowing various kinds of seeds, the seeds of ideas circulate like water circulates across the earth.

Toshiro Inaba, M.D.

Born in Kumamoto, 1979. Cardiologist and Research Associate at the Department of Cardiovascular Medicine of the University of Tokyo Hospital, specializing in cardiac catheterization and congenital heart diseases. Inaba is also involved in home medical care and mountain medicine. In addition to Western medicine, he also has expertise with traditional medicine, complementary and alternative medicine, and folk medicine. Since the East Japan Great Earthquake of 2011, he has initiated discussions with people from other fields aspiring to create a new society. He has authored articles in various journals and written publications including *Inochi o Yobisamasu Mono* (Anonima Studio) and *Korokoro Suru Karada* (Shunjusha).